



夕刊 行登日五月二十

前田醫院 院長 前田清美 植田町電話二二四

本社短歌會詠草三

一日マルトモホールにて

- 7 〇まち果けしいらたしさを吸殻の敷にいはせ
3 〇やはらかき陽の射す窓にゆらゆらとぼる煙
3 〇悟も得心は悲したまきか無我をひろへり
1 〇子供等の悪戯遊びに煙管にて煙草のみする顔
2 〇よるべなき心もちつしる夜を寂しく吾は
3 〇背を寄せて煙草ふかせばうしろより眼鏡に映
6 〇箱消ゆる葉の針芽のすがしきよ段々煙に煙草
〇止せるなら止せよ煙草と語し終へ樂屋に入り
1 〇いざさらば日暮れ近しと我が抗夫は吸ひ差し
4 〇掘り上げし蕪蕪見つめ土堪ばたに我れ樂しげ
2 〇この頃は眞くゆらゆらしゆるく品買りつくる
6 〇晴れやかにバットくゆらす一團の葉つば服乗
〇ふしどにてささみくゆらし朝に父はその日の
〇長夜なり祖母は猫背をなほまるまきせむき
2 〇山峽の草むら中に寝ころびつみかす煙草の煙
1 〇友の居ぬ部屋に火鉢に吸殻をさし並べつ待
2 〇つぎつぎにならふ煙草の吸殻に友とからたらふ
〇待ちあぐみ吸ひ續けたり不四本來る管の友
1 〇夕焼に小川の畔に腰すて紫色の煙り何處消
3 〇しのびよる冬の氣配に此の朝の煙草の味も身

藤原義江 母をたずねて
(1) 巡りめぐりあふまで
(2) 夢寐忘れざりし母
(3) 再會したといふ、實に劇
氏が歸朝する毎この文字が代は明治四十二年、大阪の
新聞、雑誌を賑はした。あゝ大火の附親子が別れ、
それは藤原の宣傳記事だ。なつて、日まで運命の神に
その悪評をする人もあつた。弄あそばされ、二十四年の夢
が、はからずも事實となつて、胸を刺して来た。其間、
て生みの母、二と四年振り、と母あがらる、妹、

潮聲視静抄帳
〇課題
『野分』 赤羽松堂選
地をすつて飛ぶや野分
の夕陽 文 狂
枯枝に百舌鳥たけり鳴
こもりあて野分に暮る
日なりけり 長 貴
野分つきてかわき
つたる空の色 眞砂常
白鳥のわたち吹かる
野分かな 一 來
嘶きて野分に向ふ仔馬
かな 枯 萍
夕べとなればおとろ
ふ野分かな 香村子
(社)の今日
停車場の裏の冬日に風
わたる、田尻にひくき
畫の月見ゆ
若山 秋水
乾鮭のたがひ瘦せて
下りけり 紫 江

山の怪秘
戸隠 山(56)
奇譚 丸山寛雄作
(56) 眞木浪書
圓岩の二人(七)

でも遠くよくは見えませ得意になつて話出した
んでしたが、内陣の隅に長「どうですかねお頭、この
細い鐵の箱が立て、ありま奇妙な祈禱を一つためして
した。所化僧の話によると、御覽になつては
諸々の病、諸々の悩みをも「それもさうだが、その瓶
つた人は、その中に入つての薬も効くと云ふやない
祈禱して貰へば、立ちどころか
ろに癒える、といふのでし
「これですか、これはきく
にはきくが何遍も根氣よく
似て話した
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞

彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞



彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞
彦次は熱心に手つき手眞

七五三子供服!
ハヤシの思ひ切つた大奉仕
子供服男児 二四六十銭
子供服女児 二四六十銭
ハヤシ 子供洋服店

冬呉服大賣出し
御婚禮衣裳大提供
三井呉服店

高島屋洋服店
電話三八六番

三井呉服店
謹啓初冬の候各位益々御清祥の段
奉大賀候。陳弊店儀今般平町二丁
日通り中野洋品店向側へ移轉仕候
尙既製品豊富取揃へ申候御倍仕の御
愛顧御引立賜り度先は移轉御通知旁
々御案内申上候
昭和九年十一月

六日
日六三六 月出前 六〇〇
日四二八 月夜後 三〇〇
日三三五 月夜後 一〇〇
日三三五 月夜後 一〇〇
日三三五 月夜後 一〇〇

ホシチエンストア 景品附大特賣
一、ホシ胃腸薬金五拾銭お買
二、賣出期日 昭和九年十二月十五日より
三、抽籤期日 昭和十年二月十一日
四、抽籤券 壹萬枚を以て一組とし
五、景品 壹萬枚に對し
六、景品は
主催 星製薬株式会社
ホシチエンストア平支部
ホシチエンストア一 同

